

円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

1964

1月・2月


日本GAPニューズレター

—1964—


1月・2月号目次

通巻第20号

最近の情報 G・アダムスキー	1
質疑応答 C・A・ハニー	7
カルマとは何か //	10
真実と虚偽 //	12
トピックス	14
私のUFO目撃日記 工藤智恵子	16
テレパシーの参考書	19
テレパシー講座 2 C・A・ハニー	21
編集後記	33



最近の情報



G・アダムスキー

クリスマスへのメッセージ

毎年このごろ、約二千年前に生まれて人類に誠意をもたらした平和の王子¹を私たちは思い出します。

彼の誕生は謙虚そのものでした。なぜなら世界は彼以外の人にとってたいするようにならなければならぬとされたからです。しかし動物たちは受け入れました。それで彼は馬小屋を自分の出生の場所とし、動物たちが食事をするカイバオケのなかに自己の休息の場所を見い出しました。大師にたいして食卓を提供した動物たちこそまことにさいわいなるかなです。

そうです。彼は神の似姿をした人間としてあなたがたや私と同様に肉体をもって生まれました。そして全生涯を通じて人類や教義の差別なしに全人類に奉仕しました。

救世主の光が彼から輝き出て人類が進むべき道を指し示しましたが、彼を受け入れた人はほとんどいませんでした。なぜなら彼

は人々にたいしてこの世の繁栄でなく、彼の父²の繁栄を約束したからです。それはただ信念により、彼のようにならねばならぬと、父²にたいして役立つことによってもたらされる繁栄です。

そうです。神の似姿をした彼自身は人間によって試されました。これは彼がこの世界の神々によって多くの物事で非難されたからです。しかし彼は十字架に至るまで動揺しませんでした。

彼は自分が愛した人々たちによって裏切られ、三十枚の銀貨で売られました。ただ一人だけが使命の最後まで彼と共に踏みとどまりました。二千年はわれわれに繋がっていて、われわれも毎年同じような裏切りをくり返しています。人々は彼が教えたとおりに生きないで祖先の態度にならっているからです。

いつになったら人間は目覚めるのでしょうか？ いつになったら人間は自分自身を判断の王座に置いて目を開き、万物の内奥にある真実を見るのでしょうか？ そしてペテロがイエスのなかに見たように万人のなかに神の火花を見ることでしょうか？ いつになったらわれわれはイエスをわれわれの一部として受け入れることでしょうか？ あと幾年イエスは待たねばならないのでしょうか？ この答えはわれわれ各人のなかにあります。人間は拝金主義を続けるか、それとも人間が認めることのできなかつたあの救世主を選ぶかのいずれかです。その答えが出されるのは近い将来でしょう。

人の上に人を置かないで全体が一体となった奉仕、そして謙虚さと感謝こそ必要なのであって、そうすれば生命は律動と調和のなかにあり、闘争と誤解の余地はなくなるでしょう。

この太陽系の諸惑星に住んでいる人々は、こうした生き方を楽

しんでいます。彼らはわれわれの生き方が価値のないものであることを知っていて、自然の様相を探究してきました。これは生命の永遠の活動と目的をもっと充分に理解するためです。

この一例をあげましょう。宇宙人たちとの最近の会見で、彼らはいつこのあいだ金星で開かれた祝賀会について話してくれました。各地区の代表責任者の一団が一定期間の奉仕を完了し、この祭典のために設けられた休暇中は新しい市民の奉仕者が責任者として選ばれました。

祭典中は任務を立派に果たした前記の人々を記念して、スポーツの大会、饗宴、劇の上演などが催されました。しかし最大の報酬は各人の心のなかで感じられました。というのは、それは一つの特権であり、彼らの生命はその体験をもったためにより豊かになったからです。

この祭典の数週間前に金星の各地は激しい電氣的な雨のあらしにおそわれて、このために森林や村落に莫大な損害を与えたという事です。

この情報を私に与えてくれた宇宙人たちは短期間の滞在のために地球へ来たばかりでした。彼らは一機の宇宙船に乗って、最近ソ連が開発した宇宙船が飛ぶのを観察していたのです。読者はたぶんこのソ連製宇宙船に関する記事を読んだことがあるでしょう。それは空中に停止し、上下、左右、前後に動くと言導されました。宇宙人たちは地球人がこのタイプの宇宙船をどんなにうまく開発したかを見たかったです。彼らの話によれば、このタイプの宇宙船をもう少し改良するならば人間を乗せて月へ行行って帰れるだろうということです。

金星の友から聞いた別なニュース

地球の時間で計算していまから約五ヶ月後に、この太陽系の運動を検討するために土星で科学者の会合が開かれます。だれも知っているように目下太陽系は変化を起こしつつあり、全惑星に奇妙な事柄が発生する可能性があります。観測装置類はこの変化を記録しつつあって、新発見のグラフを作っているという事で、これは研究されて過去の記録と比較されるでしょう。この新発見の知識はしばらくのあいだ伝えられませんが、それを検討するには時日を要するからです。しかし決定的な事実が判明すれば地球人にも知らされるといふ事です。

さらに彼らが語ったところによりますと、金星の科学者は地球人が建設的な計画に腰をすえて、宇宙を航行しうる宇宙船の建造に成功すれば地球人は他の惑星を訪問し、地球を正しい友好関係に入らせることができるからです。これがなされて、地球人の信念が高貴な目的にもとづくようになれば、混乱した想念伝達を応用している宇宙のもろもろの勢力は、もはやこれまでのように地球人に影響を与えることができなくなるでしょう。地球人はこのヴィジョンを拡大する必要があります。地球人は自分たちのせまい量見がいかに無意味であるかに始めて気づくでしょう。宇宙は驚異に満ちていますし、それはまた目撃されねばなりません。地球人は自我の束縛をもって自分を閉じ込めてきました。創造者のより精密な、より内奥の仕事については実際に何も知らないのに。最近までは宇宙や他の惑星で発生する出来事に関する情報を得る

ことが一時不可能でしたが、これからはまたときどき情報を与えられるものと思えます。

創造者の創造物

地球では近ごろになってやっと地上数千フィートを飛ぶことを知ったというのに、宇宙空間を自由に航行しているブラザーズ（宇宙人）以上に創造者の創造物について地球人に教える資格をいったいだれがもっているでしょう？

生命は始めも終わりもない永遠なるものであって、しかも宇宙人たちはわれわれと同様に創造物の一部であれば、われわれは創造の目的と生命の目的については彼らからこそ多くを学びとることができるとは思いません。

彼らは宇宙を航行し、他の諸惑星を訪れたりしていますが、われわれは地球に閉じ込められています。しかも地球は永遠のひろがりのなかの一個の小石にすぎません。彼らは宇宙旅行と意識の広大さの観察とによって多くを知ることができたのです。地球人はこれまでにそうした機会をもちませんでした。しかし現在はその機会が与えられています。というのは地球人も法則に従ってやがて永遠のなかの多くの艦を訪れ、「父」の偉大さを知ることができるからです。

たしかに古代の教えは人間を生命の道に歩ませて現代の段階に至らしめるのに役立っています。そしてこれらの教えは高遠なものでした。いまや地球人はたえまなく展開する知識にたいしてドアを開きつつあり、宇宙船に乗って、「父の国（宇宙）」を旅す

る機会を始めて与えられています。そしてまた他の惑星に住みながら創造について広大な視野をもっている人たちの知恵にあやかることもできます。地球人が踏み出そうとする一歩一歩は、これまでだれももたなかった体験と知識をもたらすでしょう。ひとたび、「父」の法則を知るならば、地球人の到達しうる距離と場所に制限はありません。

これは具体的な証拠を必要とする人には大きな価値をもたらすでしょう。しかし地球人は自分が何をやるうとしているか、そしてどこへ行くうとしているかについて意識的になる必要があります。意識的な知覚力がなければ人間は動くことも宇宙船を建造することもできないからです。

しばらくのあいだはおそらく少数の人だけが地球製の宇宙船に乗って宇宙旅行を試みるでしょうが、多くの人も自分の心を自己の実質のなかに没入させれば、みずから宇宙を旅行し、多くのものを見ることが出来ます。そして宇宙船で旅行する人よりも多くを学ぶことが出来ます。彼ら多数の一般人も宇宙の彼方へ航行しうる宇宙船の建造と改良に関心をもつであろうからです。しかし地球に住んでいながらも宇宙船の改良に必要な知識を得るためには心が、「因の意識」の導きのもとにあらねばなりません。

金星人は幼時からこの訓練を受けています。そして、「因の意識」が彼らに多くの物事を教えるのです。しかしこの幸福な生活状態を楽しむためには、自己の実質の精妙さをあらわすための信念、謙虚さ、尊敬、決意などをもつ必要があるのです。

地球人が創造者の意識とつながる自己の実質の意識に心を没入させるならば、機械に頼るよりもはるかに早く進歩するでしょう。

なぜなら 宇宙船を建造してそれを宇宙空間へ進行させるには時間を要しますが、意識による旅行にはほとんど時間を要しないからです。

われわれはいまこの点で発達の段階にあります。そしてこの好機を利用する人のすべては、肉眼で見たり耳で聴いたりすることのできない驚異を次々と見るでしょう。

このような意図においては信念が大きな役割を果たしますし、自己訓練がきわめて重要となってきます。また無抵抗の態度をなくさねばなりません。それは弱さをあらわしているからです。それよりも神の目的の成就にたいする決意に満ちた態度が必要です。人は崩れやすい砂の上に自分の土台を築くことはできません。本人の信念はそれをテストするための変動が起こっても微動もなしの岩のごときものである必要があります。そうすれば本人は完成していなくてもしっかりと地に足をつけることになります。しかし砂上に土台を築くならば、それは洗い流されて本人は忘却の彼方へ押しやられるでしょう。いまは人間が創造された目的のための元の位置へ帰るための好機です。

学習というものは決して終わることはありません。なぜなら、いまだれもかぞえることのできない海洋、小川、または大きく見て地球それ自体のもつ砂の粒すべては、人間の心にとって一つの大きな砂のかたまりにすぎませんし、永遠のさなかにあっては最小のかたまりですが、やろうとすれば各粒のすべてを理解することはできますし、それらの粒が創造された目的を知ることでもできるからです。

ここであなたがたはいくつかもありません。「創造者はどんな種

類の心または意識をもっているのか？」「われわれも創造者と同じ意識をもっているのか？」と。

そうです。われわれも創造者と同じ意識をもっているのです。

創造者から引き継がれた各種の能力は創造物の内部に宿されています。しかし万物は創造者が放ったのと同じ意識を用いねばなりません。この地球こそ「宇宙の父」の息子や娘たちが「父」の意識を体得すべき場所です。

土星旅行における宇宙船のスピードに関する疑問に

答えて

「土星旅行記」中における宇宙船のスピードについて私の親しい友人たちからさえも批判が出ています。地球人は知識においてやと発達し始めたばかりで、しかも長い時代を通じて宇宙の諸原理に反する物事を教えられてきていますので、何かの新しいアイデアや考えがかつて古い知識と一致しない場合は、それにたいして疑惑が起こるのは当然です。そしてすでに固定した心の持ち主にそうした新しい考えを説明するのはときとして少々困難です。

土星への旅行には本来もっと短時間で行けるのに、あのときはよけいな時間がかかりました。これは私が新しいタイプの宇宙船に乗ったからです。しかし以前に述べましたように、行こうとすればまばたきをするほどの時間で行けたでしょう。私がここで説明しようとしているのは、靈魂遊離現象、物質の消滅現象、催眠状態などではありません。

土星旅行における空間の進行方法はわれわれの知識にとって実際には新しい方法です。もっともこれは科学界ではとどき話題になりますが。この方法にたいしては、テレポーション（瞬間的遠隔輸送）と名づけられています。そしてひとたびこの方法が開発されるならば、戦車やその他の装備をした一万の兵力を瞬間的に遠隔地へ輸送することが可能であるといわれています。土星人はこの輸送法を開発していて、宇宙旅行にこれを応用しています。この地球上で私以外にこの種の体験をした人があるかどうかは知りません。

それは最も爽快な気分で、心はきわめて高度な知覚状態にあります。なぜならこの法則は極度の高周波で働くからです。しかし肉体や船体を分解するほどに分子をバラバラにしてしまうようなことはありません。

ひとつ説明しましょう。われわれが使用するテレビはこれと似た法則で働いています。三千マイル彼方で生きた人間や風景などのテレビ放送が行なわれるとします。その放送の最後のシーンが終わるまでには増幅器の助けをかりて生きている俳優や風景は像として何度も世界中をまわっています。そしてテレビ受像機はなんなくその番組を映し出しています。この場合、俳優は発生している出来事（演技、撮像、放送、受像など）を意識していませんし、また視聴者はニューヨークで演技が行なわれていることを充分に承知していながら、しかも俳優は像としてロサンゼルスや他の場所に出現するわけです。

テレポーションはこれと同じような原理で起こるのですが、ただ異なるのは、本人が実際にある場所から別な場所へ肉体のま

ま移動するのであって、画像として映し出されるのではないのです。例の土星の宇宙船はこの法則を応用しましたが、その場合はこの目的のために作られたある装置によってそれが可能となったのです。乗船者たちは発生している出来事をよく意識していて、われわれは正常な活動を行なっていました。違うのは、われわれは少し異なるふん囲気に気づいていたという点です。この感じは俳優が自分自身のもつ性質とは別な人間の役割を演じる場合に比較してよいでしょう。俳優というものは自分が演じている仕事や普通自分がすごしている生活とは異なるふん囲気をもつ役割を意識しているのみならず、その反面自己の本来の姿や自身のふん囲気をも意識しています。しかし、その劇が高尚な性質のものであるならば、本人はその劇の一部であることによって自然に気分が引き立ってきます。ところが劇が終わると完全な変化が起こって、本人はもとの自分自身のふん囲気に返ります。私が土星旅行から帰ったときもちょうどこれと同じ感じが起こりました。

これは日常だれにもよくあることです。特に多くの美しい場所を見たり、異なる世界に住んでいた旅行者が、帰宅してからも元の自分のふん囲気に立ち返るのに数日を要することがあるでしょう。あれと同じです。

さてここで、まばたきをするほどの時間で、と私がいった意味を説明しましょう。もしテレポーションを発生させる法則が百パーセント応用されたならば、われわれは瞬間的に目的地へ到着していたことでしょう。また船体自体も必ずしも必要ではありません。なぜなら例の特殊な装置さえあればわれわれは地球から土星へ輸送されたかもしれないからです。しかしそんなことをす

れば肉体は完全に消滅し、意識だけが運ばれることとなります。私が乗ったときは法則をパーセント応用しないで、わずかにパーセントだけ応用されました。そのために船体の猛烈なスピードにもかかわらず人体が完全に保たれたのです。

船体は乗船者ばかりでなく船体自体の保護要素です。これは高速の航空機または人間を乗せた宇宙ロケットの場合に似ています。それゆえ法則の五パーセント応用によって土星旅行に九時間かかったわけです。

われわれがこの法則を知るならば、時間と距離は無意味となるでしょう。自分が動いているという事実が実際にはわからないからです。

このテレポーションと、いわゆる「意識による旅行」とのあいだには相違があります。「意識による旅行」においては肉体が元の位置に残っていて、本人はただ意識的に空間を進行するので荷物類をもって行けません。宇宙船で進行する場合は荷物を携行できます。

これで、私の土星旅行に要した時間に疑惑をもっておられた方は、その理由がおわかりになったことと思います。いずれはこの方法が日常茶飯事となる時代がくるでしょう。

この装置を所有しているのは私がかぎりでは金星人と土星人です。火星人もこの方法を開発しようとしています。金星や土星ほどに進歩していません。

過失を気にしないこと

これまで私が働いてきた分野にたいして忠実に支持して下さった方々にお礼を申しあげます。人間として私はあなた方と何ら異なるものではありません。ですからやはり過失をおかします。しかし過失をおかしたときはできるだけそれを訂正します。過失によってわれわれはさらにすぐれた方法を知るので、ただしその過失をみずから認めるほどに大人であればです。一人間として私はなるべく右にも左にもかたよらないで、ある種のバランスを保つようにしています。

私に寄せられる質問類にたいして、その全部に私が回答できるわけではありません。私の援助を必要としている人たを助けようとして私が努力しているこの分野で、その人たちがいかなる心と目的とをもっているかを私は知っています。

現在直面しているエレクトロニクスのような技術の分野においては私はいたいの様子を知っていますが、詳細は知りません。私がこれまでに会った宇宙人たちは宇宙的な心をもっていますけれども、すさまじいばかりに機械化されているわけではありません。ただし宇宙船の修理や維持には熟練しています。

人間の目的または宇宙の運命に関する諸問題にたいして私は答えることはできません。しかし今日の科学技術に関する私の知識には制限があります。私は生や死を恐れはしません。また生命の努力の分野においても、思いがけない討論でも、他人に面と向かうのを恐れはしません。

私は「宇宙」以外に参考書をもちません。それで解答が必要なときはそれがやってきます。私の心はその解答をときとして誤解するかもしれませんが、その場合はただちに誤りに気づいて正し

い解答が置きかえられます。

現在はわれわれ自身を試みるべきです。なぜなら軽べつ、猜疑、皮肉、不信、憎悪などが社会の根を掘っていて、人間を互いに分裂させているからです。これは主として一般の指導者が人々の召使いであるという立場を忘れることによってひき起こされています。



(二十ページより) 近代の物理学者たちは、古代ギリシアの哲人たちの物質にたいする考え方を正しく把握しておらず、皮相的にとって過少評価しています。古代ギリシアの哲人たちが問題とした「アトム」は、現代のいわゆる原子ではなく、光の粒、精気の粒、原質の粒、エーテルの粒・・・要するに粒としての存在の最小単位をいったものであり、デモクリトスはこの粒すなわち微子を、宇宙の根本的な渦動体だ、といったと思われまます。

この微子はたしかにほぼボールの体を形成する、回転進行方向をもつ渦動です。

しかし宇宙には粒をなしていない、もとのままのエーテルがあつて、宇宙の全微子のすき間をうめています。このものが磁気であつて、超高速のエーテルの流れです。古代の哲人たちが真理そのものをよく把握したともいわれませんが、近代の哲人(物理学者たち)よりは深い思索からアトムをいったことは事実でしょう。

アトム以外の面でも近代の哲人たちは決して古代の哲人をあなどれるどころか、驚きあわてるでしょう。たとえば紀元前三百年のころに「触覚! 触覚こそ神々の聖なる権能にかけて、われらの全身の感官なのだ!」と叫んだかのエピクロスは(十一頁へ)

質疑応答



C・A・ハニ

問 1 一九六三年十月十四日付のロンドン・デイリーメール紙に次のような記事があります。「火星上に核爆発? 米ソの科学者は火星上にせん光を発見したが、そのあと核爆発の徴候を示すキノコ型の雲を観測した」これについて御教示下さい。(英国、ハートフォードシャー、レッチワース、J・R夫人)

答 この現象はおそらく火山の爆発と思われまます。近隣の各惑星群にも地球と同様な天候異変や自然現象が発生しています。これは現在地球に影響を与えているのと同じ原因すなわち太陽の磁極の逆転によってひき起こされています。太陽に磁極の逆転が発生したという私の報告を疑う人もありますが、これはウィルソン山及びパロマー天文台のハロルド・D・パブコック博士によって発表されたもので、一九五九年十月二十五日付のロサンジェルス・エグザミナー紙に掲載されました。

問 2 引力をコントロールして推進させる宇宙船の開発研究を行なっている会社が米国にありますか。(シアトル、D・B)

答 あります。次の各社がそのおもなものです。ヒューズ航空機

会社、グラマン航空機会社、重力研究財団、米國規格標準局、ライアン航空機会社、スベリー・ランド社、ロッキード航空機会社その他。

問 3 天文学者や電波天文台などによって、他の惑星から来た知的な信号がキャッチされた例がありますか。(右に同じ)

答 この問題の回答としては公表された例だけにとどめます。一九五六年の六月と七月にこれに関するかなりの情報が新聞に出ました。この報導の最初のものには知的な信号がキャッチされた、よ「うだ」ということでしたが、後になって再びこの問題をとりあげて、その信号は地球から発射された電波が他の惑星にあたって反射したものだとのめかしました。次に一九五六年一月一日付のシアトル・ポスト・インテリジェンサー紙に、ロバート・J・グリブルが寄稿した記事を再録しましょう。

「海軍は金星から電波信号を受信しつづつあると声明した。この信号は金星が暑すぎで生命の存在に適さないことを示しているが、それをキャッチした海軍研究所の科学者達は、信号が人間の手によって発射されたものかどうかはいまいけないと言明している」

一九五六年六月二十五日にAPは次のように報導しました。

「オハイオ州立大学の一電波天文学者は、過去五ヵ月間に金星から来た二種類の明瞭に異なる信号を受信した。この学者ジョン・D・クラウス博士は、最初の音―バリバリという音―は金星の雷雨から来たものらしいと考えている。

しかし二度目の音―モールス符号の長音に似た長い持続音―はまさに神秘である。クラウス博士はその信号の発生地については推測したがない」

問 4 この地球上に現代の文明よりも進歩していた文明がかつて存在したことを証明する物的証拠がありますか。(右に同じ)

答 あります。例をあげますと、七千年前から伝えられた一個の合金があるのです。米國標準規格局がそれを調査して、それを作るにはセ氏九千度を要することが判明しました。またアイルランドとスコットランドで円型のとりでが見されましたが、その上端には花こう岩の墨壁があつて一部は溶けてガラス化してしましたが、これは原子力の熱でも利用しなければ作れないものです。これは明らかに壁を乗り越えようとする者を妨害するためにどりつけられたガラスの突起物です。

問 5 かつてあなたは想念は必ずしも脳と関係はないと述べましたが、そうだとすれば脳が破壊されたり傷ついたりした場合に知的な人が白痴になるといふのはほんとうではないのでしょうか。(ユタ州、A・G)

答 脳は貯蔵所であり、筋肉の運動の管制所にすぎないという私の記事を裏書きする医学上の多くの証拠が存在しています。この問題に関してもっと詳細に知りたい方は、グール及びパイル両博士の共著「医学上の異例と珍奇」を読まれることをおすすめします。そのなかには弾丸、短剣などで脳が傷つけられながらも精神的には何の異常もなかったという実例が載せてあります。

大脳の大部分がほとんど完全に破壊されていながらも本人の精神がはっきりと残ったという医学上の記録が二、三あります。また精神異常であった人で死の直前に短期間正常に立ち返った例もあります。死体解剖の結果、本人の脳の空洞は液体で満ちていて、脳は完全に破壊されていたことがわかりました。本人が正常にな

った事実は医学のあらゆる説明をもってしても解けません。

先にあげた書物中に、**脳しゅうよう**の人がいて、そのために五インチ以上の長さにもわたる脳の空洞ができていました。ところが本人は死ぬまで正常な精神状態を保っていて、普通の記憶力を行使していました。しかもその脳のほとんどは破壊されていたのです。

問 6 人間のオーラ（靈光）の正体は何ですか。（質問者多数）

答 人間のオーラというのは肉体をとりまいて存在する一種の磁場です。実際にはこの磁場はあらゆる分子やあらゆる物質をとりまいて存在しています。オーラが強烈な場合は、視力を拡大してそれを観察できる人もいます。そのような人の目は一般人以上の視力をもっているものであって、これは普通の人よりも特に高音を聴きとれる人と同じようなものです。

エドガー・ケイシーは当然のことながら人間のオーラを見ることのできた人です。（オーラの性質や正体について説明するには紙面が足りませんが、これは「テレパシー講座」のなかで詳説します。その際は分子説と電磁気の基礎的な知識を含む科学的な解説も載せる予定です）

ケイシーはあるエレベーターに乗り込もうとしたときの体験をしばしば語っています。それによりますと、内部は明るくて人がたくさん入っていたのですけれども、彼は内部が暗く見えたために入るのをためらいました。そこでエレベーターの運転係に出発するように命じましたが、それが出発してから突然彼は内部が暗く見えた理由に気づきました。エレベーターに乗っていた人たちはオーラを放っていないか、すると急にケーブルが切れ

て乗客は全部死んでしまいました。この場合はオーラを放っていなかったことが乗客の切迫した死期を知らせたわけです。

オーラには多くの色が現われて見えますが、どんな色が見えるかは観察者によって異なります。個人の健康や体質の状態がオーラの色の性質でわかる場合もあります。赤色はだいたい力とエネルギーを示します。神経質な人は暗赤色をあらわしており、黄金色は良好な健康状態を示し、緑色は癒やしをあらわしています。医師や看護婦は通常多くの緑色をオーラのなかにもっています。

オーラの色で完全なのは銀白色であって、これはあらゆる点でパランスのとれた進化した人の周囲に見られる色です。普通のカラー・スペクトルに見られるように、あらゆる色を混和させれば白色となりますが、オーラの場合もそれと同様です。この白色のオーラはイエスのような古代の偉大な教師に見られたのですが、これが過去の画家によって描かれた絵画に見られる後光の起りです。

オーラは全身から放射されるものなのですが、通常は肩や頭のまわりに見られるとケイシーはいつています。彼はオーラの色を要約して次のように述べています。

「各色は魂、霊、心、肉体などを反映しているが、それらは完全さの欠乏、未完成を示していることを忘れてはならない。人間が本来の正しい姿に戻るならば、銀白色が放たれるのである」



カルマとは何か



C · A · ハニ

カルマとは何でしょう。現代の定義では、カルマとは未来の存在を調整するかまたは未来に影響を与えるところの、過去の行為の結果となっています。辞書の定義では、後の状態において作用する報いの力と考えられる、存在の連続的な状態における働き、未来にたいする過去の影響とあります。現代英語においてはわれわれはそれを、過去の原因のために起こる働きまたは結果と定義しています。聖書中にもこれと同じ法則が語られています。「自分でまいたタネは自分で刈らねばならない」

しかし実際にはそれが科学上の公然たる諸法則の一つであることがわかります。「いかなる運動にも反動がある」「いかなる行為にも結果がある」「いかなる原因にも結果がともなう」自然の万物は何らかのかたちでこれらの法則に従っています。

すべての人間は現世に先立つ過去の世の生活や体験すべての結果です。あなたの前生（複数）の行為と業績は現世において何かのかたちで反映します。あなたはそれから逃れることはできません。あなたは現在の肉体と環境とをもって生まれてきましたが、それは正常な発達または過去の過失のいずれかによって必要にな

ってきたある一定のレッスンを学ぶためです。あなたは行為と体験とによって学んでいるのです。

かつての記事で私は、黒人をぎゃく待する白人は来世において黒人として生まれかわる可能性があると述べたことがあります。これはカルマの働きです。本人は自ら実際に黒人を体験することによって苦難の道（それは最上の道でもあるのですが）歩むことになるでしょう。

ときとしてこの世の環境は、必要なレッスンを学ぶために極端に難儀な時期をもつような世界です。世界の二十才前後の青少年に起こる犯罪発生率の大きな増加をごらん下さい。これは全く前生の生活の体験の結果です。第二次大戦中に急に生命を断たれて憎悪、苦痛、恨みの念をもって死んだ無数の人々のことを考えてごらん下さい。このほとんどは現在二十才前後の青少年として生まれかわっています。こうした前生の体験の結果（カルマ）はいま始まろうとしています。彼らは学ばねばならない多くのレッスンと忘れねばならない多くの憎悪とをもっているのです。

カルマは必ずしもある行為の行なわれた生涯中にその代価を徴集するわけではありません。次の世かまたは数回の生まれかわりを経た世で起こることもあります。

前生において密接な関係にあった相手と現世でも同じく密接な関係をもつという例がよく発生しますが、これもやはりカルマのためです。（これは集団カルマと呼ばれています）ある人が前生で一族、一団体の一員であった場合、未来の世においてそれを帳消しにする必要のある強力なカルマのきずなを持続することがあります。家族または団体の全員から生じる相互に影響を与え合

う力が、本人が生まれかわる環境を作り出すのです。前生における兄または姉は次の世で妻または母、兄または父であるかもしれませんが。環境がどのようなものであろうとも、それは彼らを一緒に集めたカルマの負債を完全に返済するための好機であるのです。

一組の男女が互いに始めて会って、文句なしに引き寄せられ、しかもその理由が理解できないことがあります。そして人々はそれを、「目ぼれ」といっています。しかしこの場合、もしこの二人の前生が判明したならば、おそらく二人は前生で非常に親しい間柄で互いに知り合っていたことがわかるでしょう。二人の内奥の真の自我は時間と空間をこえて互いを認め合ったのです。

友人同志もだいたい次の世で出合います。これもやはり二人の親密さがカルマの負債を作らざるを得なくなり、それが来世で二人を引き寄せ合うわけです。

カルマは、あなたがどのような家族に生まれてくるか、あなたの肉体の型、種族、皮膚の色などを決定します。これが、他人に兄弟愛をもって接することと「自分が他人からしてもらいたいと思うことを他人にもせよ」というのが最上の生き方である別な理由です。

さてそれではどうすればカルマの負債を返済することができかを説明しましょう。というのは、死と生まれかわりのくり返しは、各生涯において作り上げられたカルマのきずなのすべてを打ち消す機会のないままに無限に続いてゆく、「出来事の連鎖」であるかのように見えるからです。この例としては、数回の生まれかわりの各生涯において互いに反目し合っている二人の人間をあげることができません。見た目ではこの反目は終わりそうにありませ

ん。どうすればこのカルマの負債を返済して、いまわしい因果関係を解消することができましょうか？

解答は次のとおりです。右のうちどちらか一人が「一方のほおをなぐられたら他方のほおを差し出して、相手を許すことが必要なのだ」という認識に到達するほどに進歩するとします。状況はどのようなであらうとも、謝罪または容赦は負債を張消しにして、少なくとも反目の部分のカルマを終滅させます。すると次の世で二人が出会ってもおそらく友人となっていて、もはや二人のあいだに反目はないことがわかるでしょう。

こんなふうにして始めはゆるやかに、次第に急速にカルマの循環が打ち破られるようになり、ついにはカルマの負債が帳消しになるのです。ただし一つの事柄を忘れないようにして下さい。もしあなたがこの世で他人をだましたりウソをついたりするならば、この世、次の世で、その代価を支払わねばなりません。それを逃れることはできないのです。

~~~~~

(七ページより) 「事物はたえまなくこまかい薄膜を放射し、これはこえがたい速さですみ、われわれを形成する原子をたたき」といって、ほとんど明らかに、超高速で物体から放射される電磁波の姿を洞察、発見していたことを示しています。またエビクロスは、地球以外にも地球と同様の天体のあることを明示しています。

電磁気の書を研究する場合、あまりにも数式を尊重すると、古代ギリシアの哲人から笑われかねない皮相的な結果になります。テレパシー研究のためには電磁気を哲学的に考えるのも大切です」

# 眞実と虚偽

C · A · ハニ

過去数年間たびたび流布された物語を最近数種類の雑誌がとりあげているようです。簡単にいえば、こうした物語によると敵意のある宇宙人が太陽系内をうろつきまわり、近隣の惑星に属する宇宙機を破壊しようとしているというわけです。

またある種の心霊研究誌類は、特に火星は敵意に満ちていて、金星の宇宙船を攻撃したと述べています。真相はどうでしょう？ここ数年間われわれが出している刊行物や特にアダムスキー氏の『空飛ぶ円盤同乗記』を研究された方は、右の話が眞実でないことを知っているはずで、アダムスキー氏によれば、火星はきわめて友好的な人間の住む惑星であって、高度に産業が発達し、金星や他の惑星群と完全に協力しているとあります。

右の書物の五十五ページ（注。邦訳版）に次のような記事があります。「他の遊星の住民が非常に友好的であることはすでに知っています。ただし地球人だけは全く例外ですが」。多くの遊星では大空艇を建造していて、私たちが訪問しますと歓迎してくれますし、彼らも友人として私どもを訪れます。これらの宇宙船が絶対に接近しないのは地球だけです。地球人が自らの狭い枠を越えて目を開き、大いなる友情を理解する時期が来るまでは着陸を禁じられています。……各遊星の住民は互いに未知な

のではなく、万人が友なのであり、行先では必ずあたたかく迎えられるのです」

右の箇所はオーソン（注。空飛ぶ円盤同乗記中に出てくる金星人）がアダムスキー氏に語った言葉です。もしオーソンのいつてゐることがデタラメであるならば、真相はだれにもわかりません。反対にこの言葉が信ずるに足るものであるならば、前記のごとき金星の宇宙船が火星から攻撃を受けたというのは完全にウソです。

また『空飛ぶ円盤同乗記』中の八十三ページに次の言葉が出ています。「地球人の戦争という状態は、もう永いあいだこの太陽系中で地球以外の遊星には存在しません。もちろん各遊星人といえども低次から高次へと段階を通らなければなりません、地球人のそれは自然のそれではなく、むしろ成長と破壊の無限の連続です」

右の引用からして確かなことが一つあります。すなわち、一九五二年にアダムスキー氏が会った宇宙人たちは、火星人の九十五パーセントは敵意をもつとか金星の宇宙船が攻撃されたとかいう説——この流説は宇宙人から伝えられたという——とは関係がないという事です。そこで、この流説が眞実の宇宙人から出されたものでないとするれば、いったいどこから出たのでしょうか？

参考のために再び『空飛ぶ円盤同乗記』中から引用しましょう。「ところでこのような理由から、始末に負えぬ者たちの新しい住家として地球が選ばれたのですが、この追放者たちはいわゆる『厄介者』でした。遊星人は彼らを抹殺することも監禁することもできなかつた。というのは宇宙の法則に反するからです。しかし

彼ら追放者は傲慢な性質の者ばかりでしたから、結局は自身の調和を完成せざるを得なくなるだろうと期待されたのです。これが太古の地球の十二種族の真の起源です」

右の引用からしてわれわれは現在地球上に存在する各民族の起源と、互いに反目し合っている理由とがわかります。加うるに、別な厄介者がときどき地球へ送られてきて、必要なレッスンを学ぶために放置されたのです。この人間たちについては（このなかには墮落宇宙人と呼ばれるものもありますが）、私の記事「高度に進化した遊星から来て地球で生まれかわった人が墮落するのはなぜか」（注。本誌昨年十一月・十二月号に掲載）をごらんになれば詳細がわかります。

この厄介者が最近私に関してトラブルと混乱をひき起こした張本人です。彼らは自分たちこそ他の惑星から来た真実の宇宙人であるかのように地球人に信じ込ませたのであって、しかも世界中にウソの情報をまき散らすために激しい運動を始めています。火星人の九十五パーセントが敵意に満ちていて他の惑星を攻撃しようとしているというのがごとき情報を出したのは彼らです。

彼らはアダムスキー氏のいうサイレンス・グループの背後に存在する勢力なのです。目下彼らは、私の機関誌やアダムスキー氏の著書類を通じてわれわれが伝えてきた真相と相反する情報を流すことよって、われわれの仕事を破壊しようとしています。

実際には火星人の九十五パーセントは右の厄介者と逆の立場にあります。私も金星人も土星人もみなそうなのです。これは厄介者がウソをまき散らしているからです。また彼らは心靈的なコンタクトを応用していて、同時に、ねらわれた地球人にその体験が

現実のものであるかのように思い込ませています。

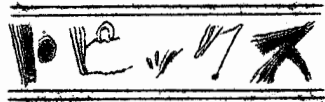
この墮落宇宙人たちがいかに混乱をひき起こしたかについては、『空飛ぶ円盤同乗記』中に記録された宇宙人の言葉と、墮落宇宙人に利用されて催眠術やその他心靈的な手段によってだまされてきたいわゆるコンタクトティー（注。宇宙人に会ったと称する人）たちとの言葉を比較してみればよくわかります。

また別な誤りは、地球のある種の団体やクラブが宇宙人側の計画の一部であるという宣伝をしていることです。だれもが宇宙人の計画の一部になることを望んではいますが、宇宙人の実際の計画についてはいっさい宣伝することなしに目的が遂行されています。

宇宙人によってこの地球上で遂行されている計画を存続させるのに特定の地球人をべつに頼りにしているわけではありません。必要な仕事を行なうのに十分な数の宇宙人が地球に住んでいるからです。もちろん彼らは地球人とコンタクトしますが、私が強調したいのは、地球人のいかなる人といえども宇宙人の計画の促進に絶対的に必要ではないという点です。

私の読者のほとんどは、近ごろ私を失墜せしめようとして流されていくウソの情報の煙幕を通して容易に真相を把握できるほどに進歩しています。

私がこの二年間述べてきた事柄はますます重要性をおびるようになっていきます。宇宙人から出たと称して流されている情報類すべてを注意深く読んで下さい。その多くは真実の宇宙人のものではなくウソで満ちています。アダムスキー氏の著書類と比較してみればよくわかるでしょう。



指で「見る」ことのできる少女

指先で物を見ることのできる一ロシア娘が、目下ソビエト科学アカデミーによって調査されている。彼女は目かくしをされたままで字を読んだり写真のなかの人物を見分けたりする。

これは盲人において発達するような微妙な触覚の例ではない。彼女は指のなかに光に感じる神経組織をもっているのだとソ連の科学者は信じている。この少女は盲目ではない。肉眼で完全に物を見ることができない。

医学界報の記事によれば、ソ連の科学者はこの少女の郷里の町ではおよそ六人のうち一人が同じような特異体質の持ち主であるけれども、少女ほどの能力はないという。この人々は指先で色を識別できるが、ただしある程度の訓練を経た後にそれが可能になるのである。

現在、指先の細胞について研究が行なわれているが、少女と同じ種類の細胞が一般の多数の人の指先にもあって、しかも本人はそれに気づかないで生涯をすごしているのではないかと考えられている。(ミルウオーキー・ジャーナル紙より)

米ソ両国でテレパシーを研究

エレクトロニクス誌でニロ・リンドグレンが述べているところによると、超感覚的知覚作用すなわちテレパシーによる想念伝達

はいまや米ソ両国政府の重要な研究課題になっているという。米空軍ケンブリッジ研究所は、ハンスコム基地にある通信科学研究所においてテレパシーの科学的な実験をひそかに続けている。この計画では専用の特殊な装置「ヴェリタク」と呼ばれる計算器タイプの機械が使用されている。

一方ソ連ではこの数年間、「生物学上の電波通信」と彼らが呼んでいる研究を続けてきた。モスクワ、レニングラード、オムスクにある研究所では、超感覚的知覚作用はセンチメートル、ミリメートルまたはそれ以下の一連の波長をもった一種の電磁気の放射線によるものであることを発見したといわれる。このさまざまな周波数がそれぞれ単一の信号を伝達する役目を果たすのである。(レイディオ・エレクトロニクス誌、一九六三年六月号より)

オルシコン管で望遠鏡の倍率が上がる

ノースウェスタン大学の科学者連は、惑星や遠い恒星から地球へとどくごくくすかな光をキャッチする新方式を発見した。十八・五インチの屈折望遠鏡にテレビ用のオルシコン撮像管をとりつけて彼らは望遠鏡の集光力を百倍増加させたという。

アプライド・オプティクス誌による報告で、この装置を利用すれば月へ到着した宇宙飛行士が地球への合図に強力なせん光を放つのが見られるし、月や惑星へ進行する人工衛星やロケット類を追跡できるだろうと科学者はいつている。(ニューズウィークより)



長いあいだキリスト教や学者が仮定してきたように聖パウロは果たして十四通の書簡を書いたのだろうか。古代教会史にたいしてあらゆる関連をもつこの疑問が、近年になってしばしば聖書学者から出されてきた。ところが現代では科学の利器がこの問題のなかに割り込んでいる。そして先週（注。一九六三年十一月月上旬）スコットランドの聖職者を兼ねる数学者が報告したところによると、パウロは例の書簡を四つしか書かなかったことを電子計算機が決定的に証明したという。

スコットランド教会のハンサムな異端者牧師であるアンドルー・Q・モートン師（四十四才）は、大論争になれている世界できっと異常な激論をひき起こすだろう。彼が「書簡」を分析するために使用した電子計算機とパンチされたテープは言語道断に非伝統的なものであるという非難を彼は蒙っているからだ。

オブザーヴァー・オヴ・ロンドン紙にモートンは次のように書いている。

「全キリスト教会の神学者はパウロの生涯に関する自己の見解を変えねばならないし、古代の教会史を訂正しなければならぬ。そしていまや何らの根拠もないことが示された教義を放棄する必要がある。聖書の解釈者たる教会の権威者は去って行け！」

モートンの発見は、一個人の文体（文章の長さ、使用語彙、その他）というものは本人の指紋と同様に独特なもので不変性をもっているという考え方に基づいている。彼とグラスゴウ大学のマクグレガーは、七年前にギリシア語の「散文」をテープに移し始め

た。計算機が文体の類似性を決定するためである。その結果、兩名は十四通のパウロの書簡のなかで四通だけが同じ「指紋」をもっていることを発見した。「ガラテア人への手紙」は真憑性が大なるために今日広くパウロのものとして認められている。それでモートンはこれと同じ文体をもつ書簡をパウロのものとしたのである。その四通というのはローマ人への手紙、コリント人への第一の手紙及び第二の手紙、それにガラテア人への手紙である。他の手紙類はパウロ以外の五名の人間によって書かれたものだともートンはいっている。

モートンの発見は、かねてからこれと同じ説を立てていて教会の権威者からこっぴどくやっつけられていた他の学者連を支持するものである。「もう一度いうが、教会の権威者は知識の進歩を科学にゆずり渡さねばならない」とモートンは宣言する。彼の報告は、「真実を探究するのではなく、すでに真実であると決められている事柄の説明をしているにすぎないキリスト教徒だ」とモートンがきめつけている神学者にたいし激しい非難に満ちている。一方権威者側もこれをはね返した。ローマのイエズス派の学者スタニスラオ・リオネットは「書簡の文体は時・話題・受け取り人などによって変わることがある」といい、このことは計算機の論理性とは関係がないといっている。

先週の日曜日にオブザーヴァー紙に掲載された反ばくで、ウリッジの司教ジョン・ロビンソン師は、「モートンの指紋による類推は明らかに誤りである。もし彼が計算にもっと時間をついやして、反神学的憎悪感をなくせば、人は彼の判断に満足するかもしれない」と主張している。そしてロンドンのキングズ・カレッジ

のタリストファード・エヴァンズは「いったい何がモートン氏をそれほどひどく刺激したかを知るのは少々困難だ」と書いている。  
(ニューズ・ウィークより)

### 円盤の実写フィルム

大当りをとったイタリア映画「地球の皮を剥ぐ」に続く第二弾として、驚くべき場面を撮った長篇記録映画、かくしカメラの眼が近く日本で上映される。イタリア・スバ・チネマトグラフィカ六三年度作品のこの映画は、全体が三十四章に分けられていて、出てくる場面がすべて徹底的に隠しカメラで撮影されているので、予想もしない出来事が画面のなかに展開する。たとえば自殺を図った人間が命をとりとめた瞬間とか、ストリップバーの生活、三角関係、ユールガールとのインタヴューなど、ローマの町をめつたやたらと盗み撮りした記録フィルムばかりだが、このなかに素人カメラマンが撮影した、空飛ぶ円盤も出てくる。これは、完全な実写、ということ、円盤研究家にとって見逃せない一瞬だといえよう。三月中旬に松竹配映系で上映の予定。



## 私のUFO目撃日記

工藤智恵子



一九六二年

二月二十八日(水)

伊東市湯川五丁目、山野トーフ店の前を歩いてたとき、ふと海の方を見ると、海上に灰色の物体を発見。もしや・・・と思つて海岸道路へ行ってみると、手石島から初島の方へゆっくり、その物体は移行し、初島上空の厚い雲の中に入ってしまった。たった一つ。無音。円盤だろうと思うだけ。午後四時三十分から六時までの間。(推定)

六月十四日

伊東市の自宅階下で。部屋にすわって東京へ行く準備をしていたら、オレンジ色に輝く物体が窓から見えた。比較的近くに見え、大きく無音。輝いているだけで形がはっきりしない。ただ一つ、ガラス窓にむかって、左から右へ、東北より西に横切って行った。ガラス窓をあけて、肉眼で母と二人で見た。

九月から十月末日までの間のある日

伊東市湯川、ガス会社と向かいあった線路より上の知人の家の庭で、なんとなく星空を見上げていたら、一つの星が星と星との間をフラフラと動きだし、下降した。初島の海上の方にゆっくり下降。しばらくして見失う。六時以後七時三十分までの間。

十一月四日(日) 晴

伊東の自宅の二階で、午後三時十分すぎごろ、寝ころがって空

を見ていたら、小さな白いものが二つ、ガス会社よりも宇佐美よりの空に突然見えた。始めは二匹の蝶かと思つて見ていたけど、ひらひらと動かないし、遠くにいるのにはっきりと見えたので、いまごろ蝶もいないだろうと気がついた。円盤の白さが目に痛いほどだった。窓からのりだして、二つの白色の円盤が遠くに見えなくなるまで見つめていた。遠くなので、音も聞こえず、形も判別できなかった。

十一月五日(月)晴、強風

伊東、自宅の二階で。伊東灣の上空に午後一時十分ごろ、白い無音のきれいな感じの物体を発見。風に流されて行くような速度。横長で一つ。

十二月九日(日)

伊東、自宅の庭にある水道でせんたくをし始めたら、午前九時三十分ごろ、音のしない光り輝く物体を見つめる。近くなのでかなり大きかった。ちょっと目をはずしたら、知らない間に消えた輝いていたので形がよくわからなかった。ほとんど動いていないみたいに、ゆっくり海の方に向かって行くようだった。円盤は気がつかない間に出現し、気がつかない間に消えた。

— 一九六三年 —

一月二日(水)

午後二時ごろ自宅前の国道で、自宅の背後の松林の上空(竜宮神社の松林)に白い一つの無音の円盤を目撃。伊東にて。

一月九日(水)

伊東。午後六時ごろ。自宅の庭で。勤めから帰ってきて、自宅

の前にある旅館の方の夜空を見上げると、雲と雲の間に一つの無音のオレンジ色に輝く物体を発見。ゆっくり上昇して雲にかくれ見えなくなった。とても美しく感じられた。

一月十日(木)

熱海。午前中仕事で内容証明を郵便局へ出しに行く途中、元の静岡銀行熱海支店の近くで、白い無音の物体を見た。かなり上空。しばらくして上昇。見えなくなる。

一月十九日(土)

伊東。午後一時三十分すぎごろ。半日の勤めを終えて湯川海岸の海岸道路を通して、なぎさ園(旅館)の前まで来たとき、太陽を見上げると、太陽のそばに輝く物体を発見。一つ。無音。まぶしかったので、目はずして再び見たとき、消えてどこにもなかった。一瞬の出来事。

一月二十二日(火)

伊東。午後五時五十分ごろ、帰宅の途中まずヘリコプターの音が聞こえたので、夜空を見上げると、白い物体が目に入った。海岸道路に行つて、しばらく空を見上げていると、ヘリコプターと白い物体を見つめる。二つともすぐにどこかへいなくなる。家の近くまで帰って来たとき、一本の電柱のそばで上を見上げると、真上に白い形のはっきりしない美しい感じのする無音の円盤を目撃。

三月十七日(日)

伊東。日中湯川海岸の波打ちぎわで、海に向かって石を投げているら、投げた石と石のあいだに輝く円盤を発見。手石島のすぐそばに輝いていて、一瞬の間に消えた。

五月二十七日(月)

伊東。自宅の二階にて。新井の山の上空に白い一つの円盤を見つめる。白色から、うすだいたい味がかかった色に徐々に変化していった。ゆっくり動きながら。

七月七日(日)

伊東。午後五時三十分ごろ、新井の山の上空に、湯川海岸にいたとき、白い物体を目撃。三分ないし四分間位ゆっくりと動いていた。そして見つけにくくなり、見えなくなった。一つ。

八月十日(土)

伊東。午後七時十五分すぎごろ、花火大会が始まってから、ひょっと壽根郷の大木の上空に花火の光とは関係ないオレンジ色に輝く円盤を三、四個見つける。見えていたり見えなくなったりしていた。しばらくして、そのうちの一つが、早い速度で伊東から去って行った。

八月十四日(水)

伊東。午後六時ごろ近所の堤防へ散歩に行ったとき、手石島の近くに、オレンジ色に輝く美しい無音の円盤を目撃。大きく見えた。五秒位見えていて、あわてたようにその物体は突然美しい海上で消えた。

八月三十一日(土)

伊東。午後七時すぎごろ二階で星の下に小さな光点が動いているのを発見。手石島付近に見える。小さな無音の光点。それははるか高空にあり、気をつけて見ていないと見失ってしまった。そうだった。一度見失い、やっと見つけることができたときには、垂直下降をしていた。そして海上に近くなったと思った瞬間、また見

失い、それ以後は見ることができなかった。消えたのか、私が見ていようとしなかったからか、わからない。

十月三日(木)

熱海。午前九時三十分すぎごろから十時三十分までの間に、それぞれ三回にわたって目撃。青い青い美しい空に二つの円盤がびったりくっついて桃山上空を沼津の方へ向かって進行。無音で白色。そして別な一つが飛行機のはるか上空に見えた。無音。騒々しい飛行機と無音の円盤とが対照的で、おかしかった。これは北から南へ移行していった。三度目は細長く、かなり大きく見えた。白色で無音。形が判別できそうできなかった。スピードをかなり出して、小田原の方へ進行していった。二分ないし三分位見えていた。いずれも事務所の窓から目撃。

十月十日(木)

熱海。事務所の窓にて。白い無音の輝いていない物体を一つ発見。沼津の方へ進行して行った。

十一月二日(土)晴

伊東。午後四時二十五分から二十七分の間、約二分間、二つの白色のUFOが、自宅の二階の窓から海に向かって右の方へ、すばらしいスピードで音もなく移行するのを発見。はるか伊東高空にあり、二つよりそったように進行するその物体は、一度薄雲の中を抜けて通った。そのうちの一つは三角形に見えた。もしかしたら二つとも三角形だったのかもしれない。そしてじきに青空の中に見えなくなった。

(注。このあと十二月二十七日まで計十日分の記録がありますが、紙面の都合により省略します)

テレビシーの  
参考書



テレビシーの参考書といっても、テレビシーそれ自体の参考書はアダムスキの著書「テレビシー」と本誌に連載中の講座以外に読む必要はないとハニーは書いていますので、ここにはテレビシー研究のための電磁気関係の参考書を紹介することにします。

まず一般社会人が初歩からとりくんで、じっくりと総合的に把握する場合の良書として次のものがあります。(初等教育を終えた人なら楽に読めて、ほとんど数式のわずらわしさが少ないもの)

◎ 下中邦彦編集、図説科学大系 9 電気、平凡社、定価千二百円、三百十三ページ、大型版。

これ一冊を読み終えるには相当時間がかかるが、電気・磁気の基本から説き起こして電子工学の最先端にまで及ぶ最新の権威ある書。絵、写真は最も豊富。本格的。

◎ 岩波書店編、科学の学校 4 電気と原子、岩波書店、定価六百五十円、三百ページ。

小学校を出た人ならおもしろく実験できるいろいろの実験法が豊富にあつて、文章は前掲の平凡社のものよりもずっとやさしく読みやすい。

(次に、比較的数式を用いているが、くだいて説いているもの)  
◎ 武田元的著、やさしい電気学、山海堂、定価二百八十円、二百八十八ページ。

◎ 石川雅也著、電気工学のすがた、第一書林、定価二百八十円、二百四十二ページ。

◎ 鳩山道夫著、電気物理入門、電気書院、定価百八十円、百八ページ。

◎ 日本電気協会編、電気事業講話シリーズ 電気の性質、日本電気協会、定価二百円(送料共)、八十二ページ。

(以上は中学・高校の物理程度。右のものよりもっと文章がくだけていて、数式を全く使用せず、字も大きく、絵がたくさん入っていて、ポケットにも入れて持ち歩ける小型本として次のものがある。A、Bの順に読むとよい)

◎ A、上田大助著、電気と其の利用、三省堂、定価百円、二百五十二ページ。(電磁気の常識的基礎)

◎ B、関英男、エレクトロニクスの話、岩波書店、定価百三十四円、二百六ページ。(電磁気の最新知識)

(右のA、Bと併用して次の書を読むとよいが、目下絶版になつていて新本は入手できない。いずれ再版が出る模様)

◎ プーターリック著、杉本朝雄訳、白水社ハクセジュ文庫V物質、電気・エネルギー、白水社。

(テレビシー研究用の電磁気関係参考書としては以上の各書で充分と思われるが、高校程度を上回る専門書で純一般向きの良書はいまのところ見当らない。理論書として比較的一般向きのものでは次の本がよい)

◎ 熊谷、富永両大教授共著、整理された電磁気学、電気書院、定価五百八十円、四百四十九ページ。

(以上のほかに生物を物理的な面から説いた次のような良書が

ある。ぜひおすすぬしたい書。

◎ オーギュスタン・ブータリック著・真木昌夫訳、白水社ハクセジュ文庫版63V生命の物理、白水社・東京都千代田区神田小川町三の二四、振替東京三三二二八、定価百八十円、百四十三ページ。

(右の書物は全部が十章にわけられていて内訳は次のとおり。)

第一章 生物の物理現象、第二章 時空と生物、第三章 生命力学、第四章 生物エネルギー、第五章 生物温度受働、第六章 浸透現象、第七章 生物と輻射エネルギー(電磁波)、第八章 生物電気作用、第九章 分子非対称性、第十章 生物界面現象。

右のなかで特に第八章がすばらしく、単なる脳波実験の説明のみでなく、精神振動による電流を実験したフアラデー函についても説明している。そして従来不可能であった精神感応に電氣的説明を与えることができる指摘し、「人間の脳から発射される波が遠方に伝播して、適当な受信可能な状態の脳細胞に印象を与えらるゝということが考えられる」と述べている。なお第二章にはルコント・デュ・ヌーイラによる生物時間の研究説明があつて、「時間」とか、年令」とかについての非常に示さに富む記述がある。これは電気といつても生物の電気についていっているのだが、読んで必ずためになるよい本である。前掲のクセジュ文庫「物質・電気・エネルギー」も良書であるが、素粒子論が主となつており、生物とは関係がないが、電気の粒子性追求には好著である。

ざつと以上のおりで、この他電磁気関係以外の有益な興味ある著書のおすすぬしたいものが種々ありますが、後日にゆずります。右の各参考書についてご教示下さつた誌友のT・W氏は次の

ようにいつておられます。

「最近はおくおぼろげながら電場・磁場が光(可視のものとか、ぎららない)の場であることが量子力学の面からわかつてきており、光流のどのような作用が電場であり磁場であるかは今世紀内には明確になるでしょう。私には次のように思われます。

すなわち、電気は有形エーテルであり、磁気は無形エーテルであつて、ともにエーテルがそのもとです。(注。エーテルの状態をあらわす図が添えてある)

このエーテルは光であり精気であり原質であるといえるでしょう。いわゆるフォトン(光子、または光粒子または光量子)は陽性粒子であり陽性粒子が一定個数集まつて凝結したものが陽電子であり、陰性粒子が一定個数集まつたものが陰電子であり、普通の電流はこの電子の流れが主となつていているものようです。あらゆる素粒子(いわゆる)は根源粒子ではなくて、粒子がそれぞれある個数凝結し、スイ星的力場をつくつてゐる粒子です。したがつて素粒子たる陽子、電子等からできてゐる原子(いわゆる)は、根源粒子などというものではなく、複合体であり、適当な手段によつて原子を分裂させることができます。

古代ギリシアの哲人たちは、究極的不可分の粒子をアトム(不可分)の意で「アトム」といつたので、現代のいわゆる原子をいつたのでは毛頭なく、エーテルの最小粒子(一定の大きさをもつ)すなわち微子をいつたのです。

微子は古代のイオニア自然哲学者のいつたのにほほ近く、一定の大きさをもち、ある条件(プラスの微子とマイナスの微子が衝突したとき)を除き、永遠に不変のものです。(七ページへ続く)

## テレパシー講座 2

C・A・ハニ 1

### 第二課

次のような質問が私宛によく来ます。「もししたら私の第六感を発達させることができるか?」「テレパシーとは何か?」「それはどんなふうにして作用するのか?」これは簡単に答えられない問題で多くの説明を要するのだと答えますと、質問者は失望して、自分たちが間違った方法を追求していたのだと感ずるようになります。それはテレビジョンがどうして作動するのかと尋ねる人に似ているというところに彼らは気づいていません。それは電気だといえはある人たちが満足させるでしょうが、もっと確実な知識を与えるにはそんな回答ではすまされません。

— 21 —  
テレパシーもこれと同様です。説明をおしすすめてゆくのにこの講座は数 月を要するでしょう。そうすれば読者はテレパシーについてわかってくると思います。われわれは原子の魂を探究し、電子と原子核の神秘をさぐることにしましょう。各課を徹底的に研究するならば、あなたはやがて概念と説明が、自然にわき起こってくるように、自分の心に入ってきます。これはテレパシーの

働きです。このようにわき起こってくる概念(複数)は自分自身が「受信」しているものとみなすように心がけて下さい。ただしそれを盲信してはいけません。その概念を真実なものとしなす前に、他の方法によってそれを確認する必要があります。

### 考え方の大きな誤り

今日世界の大抵の学校は、人間が五つの感覚器官をもつ、すなわち「五感をもつ存在」と教えています。この感覚器官とは視覚、聴覚、味覚、及び触覚だということになっていて、各感覚器官は他の感覚器官と関係なしに独立して働くことと定義されています。この考えは今日の通念の一つであって、現代人の考え方における大きな誤りです。われわれは進歩する前にこうした考え方に打ち勝たねばなりません。

あなたは人間が五感をもつ存在ではないという事実を信ずるのは困難ですか。実際には人間は四つの感覚器官しかもっていないのです。われわれは第六感を発達させることさえも期待できません。なぜならこれも実際には存在しないものを表現するために用いられる誤った考えであるからです。

— 21 —  
真実の解答を得るための手がかりとして自然に目を向けること

自然において万物は宇宙の諸法則(神の法則)に従って互いに働いており、創造された目的に従って他のものすべてと完全に調

和しています。あなたが何かに疑惑をもつ場合は、解答の手がかりとしてときどき自然に目を向けるとよいでしょう。そして手がかりがつかめるならば自分が正しい軌道に乗っていることがわかります。

われわれが心を開くならば、創造者によって産み出された型を見ることができますし、自己の周囲のあらゆる現象を公平に観察することもできます。われわれが見る最初の事実の一つは、万物は知的な指示のもとに働いているということです。万物は一つの正確な型に従っています。畑で育つ小麦はいつも小麦を生み出すのであって、他のものを生み出しはしません。この不滅の法則は小麦によって守られていて、その際小麦はその法則に従うべきか否かを自身で決定する必要はありません。再度申しますと、成熟すべきときが来たかどうかを知るのに小麦自身が気象学者に相談する必要はないのです。これはすべて自然のもつ宇宙の諸法則の一部なのであって、万物においては盲目的な服従によってきちんと守られているのですが、ただし人間だけは別です。人間においては選択権が存在することがわかります。われわれはこれらの法則に従ってもよいし、それを拒絶することもできるのです。

自然のなかで英知が働いているという事実について別な例をあげてみましょう。それは通常ビーヴァーといわれている動物に関する実例です。ある種の推理力を示す彼らの知性の一部は、建設作業に際して三種の異なる型の「巣」を彼らが作るという点で示されます。ビーヴァーの巣に見い出される唯一の相違は、島か池の堤かまたは湖沼の岸辺などのいずれに設置するかです。このために三種類のうちのどれを建設すべきかについて決定が

なされる必要があるということを確認に示しています。動物によって行なわれるこの種の決定は真のテレパシーの働きの一部であり、宇宙の法則の印象です。動物の正常な本能は常にこの宇宙の諸法則に従っています。

ビーヴァーの驚くべき英知を示すもう一つの例は、彼らのダムサイトへ木を運ぶために水路を利用する点です。彼らが倒した樹木のなかには径八インチに及ぶものもありますし、径三十三インチの樹木が倒された記録もあります。これらは明らかに重くて運搬はできません。この問題を解決するために、ビーヴァーは深さ二、三フィート、長さ千フィート以上もある水路を建設することが知られています。そして望みの樹木を難なく浮かべるのです。

次に最初のダムの下流へ第二のダムが築かれて、最初のダムにかかる水圧を減じさせるために水がせきとめられます。たしかにこれは最善の状態で宇宙の知恵に従った、自然のなかの英知です。ビーヴァーの活動は現代の最上の土木工事に匹敵するのです。

自然界でわれわれがどこへ行こうとも、万象をつらぬいている、これと同じ英知ある力を見い出します。その力はあらゆる所にあまねく見い出され、あらゆる所で応用されているのですが、人間界だけは別です。そこでは真の目的から離れたゆがみが始まっています。

#### 万象をつらぬく力とは何か

自然のなかのあらゆる生命体を調べてみますと、一つの力、すなわち万物を包む力が存在することがわかります。これはあらゆる



る所に等しく存在し、植物と動物の両方にわたってすべての生命体の活動を導いています。この力は植物でも動物でもすべてを望ましい形、大きさ、色に仕上げる創造的な力です。（小麦は常に小麦として再生します）

この創造的な力が真のテレパシーの一部なのであって、われわれはそれを「触覚」と呼んでいます。そこでこの講座で用いられる「触覚」なる語の意味を解説しておく必要があります。触覚とは創造者から放射されている「英知ある力」であり、万象を通じて存在する力であって、一定の型に従って植物や動物を導いています。ただ人間だけはこの型からされるための選択権をもっているのです。

本講座で使用される触覚という語の意味を読者に充分に理解していただくために、もっとくわしく説明することにしましょう。触覚とは何かについての意識、感覚、印象でもあるのです。この語の真意を述べるにはもう少し例をあげて説明する必要があります。

正常な人間ならだれでも自分の肉体を知覚します。肉体の各感覚器官を通じて知覚するわけです。正常な人間は四つの感覚を聴覚、臭覚、味覚、視覚と定めています。そしてこのいずれもそれをあらわすための特殊な器官をもっています。われわれは耳で聴き、目で見、味覚芽で味わい、鼻でかぎます。しかし本講座で触覚なる語が用いられる場合、それをあらわす肉体的な器官はありません。

学校では人間が五つの感覚器官をもつ存在であると説き、触覚が五番目の感覚であると教えますが、これは誤っています。触覚

は他の四つと同じように正しく感覚器官と称することのできないものなのです。

人間は四つの感覚器官をもつ存在で、五感をもたない

なぜ触覚は他の四つと同様に「感覚器官」と称されないのでしょうか。それは触覚が自ら働くためのそれ自体の器官をもたないからです。触覚は肉体によって発生しますが、本来は肉体の感覚ではありません。この「触覚」なるものは誤って第五感と呼ばれている肉体の接触による感覚ではなく、あらゆる自然と他の四つの感覚器官が活気づけられているところの「英知ある力」です。わかりやすくいえば、それはあなたの肉体内で働いている「真のあなた」の基本的な部分です。

人間の四つの感覚器官は完全に触覚に従属している

四つの感覚器官、すなわち視覚、聴覚、味覚、臭覚は完全に触覚に従属しています。この事実はやはり触覚を他から引き離しています。そして同時に四つの感覚器官も完全に各自が独立しているのです。われわれは視覚を失っても聴いたり味わったり、かいだりすることができます。他の二つを一つずつ失った場合も同じように別の三つは働きます。

ところが触覚を失ったらどうでしょう？ われわれはただちに無意識になり、触覚が回復するまではそのままの状態にあります。無意識状態のあいだにも人間は損傷のない視覚、聴覚、味覚、臭

覚などの各感覚器官をもっているのですけれども、それらは全く役に立たず、機能を停止します。もし触覚が完全になくなれば肉体は働きを停止して死んでしまいます。

したがって四つの感覚が完全に触覚に頼っているという事実は、触覚を他の感覚から切り離すことになるのです。触覚は、それを失えば必ず肉体をそこなうことになる唯一の感覚です。

#### 触覚はテレパシーを働かせる径路

いわゆる第五感とされている触覚はテレパシーが働くための径路です。このことは、この際われわれの考えを幾分訂正する必要があります。これを意味します。われわれは触覚を肉体的な感覚と考へてはいけませんし、肉体の知覚または神経反応にすぎない接触感とみなしてはいけません。触覚はたしかに接触による知覚と肉体による反応をも含みますが、種々説明しましたように、それをもっと超えたものです。それは生命体の内部にある生命力なのです。実際には宇宙の英知、あらゆる生命の基本なのであって、物質の形態を通じてそれ自体を表現しています。(ここで述べた事柄は先の個所で再び詳述します。この個所がきわめて重要で、第三課へすすむ前に理解しておく必要があるからです)

#### 人間は神の上位に自分をおいてよいか

長いあいだ伝えられてきた伝説によりますと、かつて大天使ルシファアは神の上位に自分をおいたために、第三の天使とともに

地上へ落とされたとあります。

これが事実であると人々が信ずるかどうかは別として、やはりこの物語から価値のある教訓を学ぶことができます。ルシファアは自分のエゴ(自我)に負けたために墮落したのです。彼は創造者の動機に疑惑をもち、宇宙の諸法則の上位に自分をおいたのですが、その結果は破滅でした。

多くの人はこれと同様に自然の創造物にたいする不平の声をよく耳にします。あなたは次のような言葉を聞いたことはありませんか。「私だったらバラの木にトゲをはやせたりはしないのだからあ」または「なぜ神様は毒草を作ったのだろうか?」その他これと似たような言葉を数多く聞くでしょう。これは人間を創造者よりも上位におくことにならないでしょうか。これは人間の自我のあらわれなのです。

自然界を注意深く観察しますと、きわめて精巧に造られた驚嘆すべき型を見ることが出来ます。万物のすべての細胞は一定の場所と一定の仕事とをもっています。偶然なものは何一つ存在しません。

人間が大きな不平の的にしているコン虫は、万物の計画のなかで一定の仕事を行なっています。あらゆるコン虫類が突然地上から一掃されたらどうなるかをあなたは考えたことがありますか。いずれすべての生命体は死に絶えるでしょう。なぜ低次のコン虫が全自然にとってかくも重要なのでしょうか。

すべての植物はその永続をある種の受精作用に頼っています。そして受精作用をコン虫に依存しています。もしコン虫がいなければ植物は死滅するかもしれません。コン虫を食物としている鳥

のすべても死滅するでしょう。そういうふうにして結局万物は絶滅するでしょう。

あなたが万物の完全な相互依存性についてちょっと考えるならば、もう一つの普遍的な真理を悟るようになります。すなわち、あらゆる生命は一つの普遍的な英知の表現であって、その英知は触覚であるという事実です。

### 自然には分裂はない

万物は同じ自然の法則のもとに造られているということをおなたは知っていますか。すべてのものは同じ風、同じ太陽、同じ雨の影響を受けています。最小のものから最大のものに至ってすべては互いに混和しています。観察の目をこの地上から伸ばしてみますと、宇宙空間にあまねく同じ型が存在するのがわかります。人間は宇宙の創造の一部であって、その資格で万物と一体なのです。

万物を存在せしめたのと同じ英知が人間をも存在せしめたにちがひありません。それゆえわれわれは他の創造物と同様に同じ諸法則や恩恵をも受けているはずで、この生得権（複数）のなかにはどんなものがあるでしょう？

その一つは低次なネズミによって示されています。ネズミは船の沈没を予知する能力をもっていて、自己保存のために船を離れます。しかるに人間のほとんどはこんな知覚をもたないように見えます。

動物の母親たちは、自分の巢のある地域に全然雨は降らなくて

も、洪水の襲来以前に子供を他の地域へ移動させる習性があります。この知覚力はある種の予知力であって、真のテレパシートの一部です。なぜ人間はこの力をもたないのでしょうか？

人間は宇宙の英知にたいして心を閉じている

人間は自己の存在の背後にある基本的な宇宙の因（触覚）を知覚する能力を失っています。肉体の自然な無意識的な行為は依然として宇宙の諸法則に従っていますが、四つの感覚器官からできているセクスマインド（肉体の心）は従っていません。それにエゴ（自我）が存在していて、人間は利己的で自己中心的になっています。人間は自分を創造者よりも高い位置においているのです。そして創造者である、力と触覚と結びついた宇宙の英知を無視し忘れていきます。

肉体の神経反応とは何か

前にも述べましたように、多くの人はいわゆる五番目の感覚なるものを信じていますが、その場合は真の感覚ではなく肉体の接触による感覚を信じているのです。本講座でいう触覚と、肉体の接触による感覚を区別するために、後者を肉体の神経反応と考える必要があります。前者はあらゆる感じを発生させる生命力でありますので、両者はほとんど同じように見えても、前者は広範囲な意味を含んでいます。われわれは後者を肉体の接触用の神経反応と考へ、前者を意識的な状態で反応する能力をもつ英知ある力

と考えることにしましょう。肉体の接触による感じは感覚器官によって記録され、四つの感覚器官内に存在する触覚径路を通じて脳にたいする印象として脳に伝えられます。テレパシーも四つの感覚器官の触覚径路によって発生するのであって、それゆえに各感覚器官の正常な機能の範囲外にあるものではありません。

一物体に触れるとき、われわれは一定の神経反応を起こし、その反応は衝動を発生しますが、これは本来電気的なものです。この衝動は神経系統を通じて脳へ伝達され、そこで心的印象に変えられます。この心的印象すなわち「触覚」は触れた物体に関するある事実を語りかけます。そしてわれわれはその物体が丸い、四角な、熱い、冷たい、重い、軽いというふうに語りかける印象を得ます。

肉体の接触によって肉体的に体験するすべての事柄は、心的印象すなわち触覚に変えられます。われわれは目によって異なる色を知覚しますが、これは目が、その上に記録される光の波動の周波数に応じて変化する電氣的な衝動を生み出す能力をもっているからです。聴覚系統は耳のなかへ入ってくる圧力の波動をとらえて、それを電気的衝動に変えるので、それが心によって印象に翻訳されます。

こうした印象類は想念の一部である「触覚」です。いいかえれば、われわれは種々の物体との接触によって生み出される神経反応からさまざまな感じに至る、ある種の想念を得ているわけです。こうして「触覚」と肉体的な接触による感じとは全く不離一体となっていて、四つの感覚器官のなかに存在しているのです。四つの感覚器官のいずれに頼るにしても、想念が知られるようになる

のはとにかく触覚径路によるのです。

なぜ人間はこの事実気づかなかったか

一般に人間は自分が宇宙の因や自然と一体であり、自分が宇宙の英知の産物であるという事実を悟っていません。人間は孤立しているのであって、自然の諸法則をゆがめた唯一のものです。

この理由は心自体にまでさかのぼって見られます。人間には二つの大きな分裂が存在しています。一つはセンスマインドと呼ばれるもので、他はソウルマインドまたは大霊と呼ばれています。センスマインドの大部分はいままで述べてきた例の四つの感覚器官で成り立っています。それは感覚器官の反応にたいする代弁者にすぎず、ときとしてソウルマインドと呼ばれる深遠な潜在意識の一部となっていないことがあります。

各感覚器官はなぜ互いに対立し合うのか

センスマインドを注意深く調べてみますと、各感覚器官のいずれも孤立していて、互いに対立し合っていることがわかります。それらは常に敵対し合っています。すなわち各感覚器官は自身の意志で行動し、他の三つに対立しています。そうすることによって各感覚器官は宇宙の意志に対立しているのです。人間個々が一つの統一体となり、自己の真存在のために自分を理解し、この地上に生をうけた目的などを理解するまでは、前記の状態は続くでしょう。

大抵の人は、奇妙な物をなでまわしている四人のヒンドゥーに  
関する物語を聞いたことがあるでしょう。四人とも盲目であった  
ために、役に立つのは他の三つの感覚器官だけでした。その物体  
を調べたあとで彼らはすわり込んで議論を始め、その物の正体を  
検討しました。

一人はそれが頑丈な木の幹に似ていると考えましたが、他の三  
人は反対しました。すると一人が、それは触れるとザラザラした  
大きな高い壁のようなものだといいました。別な男が大へびに似  
ていると述べますと、四人目の男が「みな違っている。それは重  
いナワのようなものだ」と主張しました。

実は彼らは象をなでまわしていたのです。一人は鼻を、一人は  
足を、一人は横腹を、一人はシッポに触れたのでした。各人とも  
自分の限られた範囲での観察は正しかったのですが、互いに協力  
をしなかったために、真に有用な知識を得ることができなかった  
わけです。

一般の人間についても、四つの感覚器官のあいだに同様なこと  
が起こっています。もし目が何かを見て耳が何も聞かないならば  
われわれは迷ってしまい、幻覚を見ているのだと考えます。また  
耳が何かを聴いて目が何も見えないならば、室内に幽霊がいると考  
えます。目はある物を肯定しますが、耳はそれを否定します。耳  
はある物を肯定しますが、目はそれを否定します。その結果は混  
乱が起こるだけです。われわれが印象または想念を得る場合もこ  
れと同じ事が発生します。感受する印象が自分の先入観と一致し  
ないならば、それを拒絶するか無視します。たとえその印象につ  
いて考えるために充分な時間をかけても、われわれはそれにたい

してセンスマインドを対抗させて、ついにはそれを拒否してしま  
います。

人間のあらゆるトラブルの背後に原因があるのは、今日人間の  
各感覚器官（センスマインド）から起こるこの混乱なのです。そ  
れゆえ、各感覚器官を宇宙の法則の諸原理に順応するように訓練  
する必要があります。

#### センスマインドをコントロールし、統合する方法

習得しなければならぬ最も困難な法則の一つに、忍耐の法則、  
と呼ばれているものがあります。われわれのセンスマインドはこ  
の法則を理解していませんので、訓練によってその法則に従わせ  
るようにならなければなりません。するといつかはセンスマインド  
は訓練によって従うようになるでしょう。あなたの各感覚器官が  
高次の法則に従属していることを自分で意識的に認めて、自分の  
反応の背後に反応すべてを支持している一つの「因」が存在する  
ということを知り、その知識にもとづいて行動するならば、あな  
たはセンスマインドにもこのことを認めさせるように訓練してい  
ることになります。こうして意識的に感覚器官へ法則にたいする  
服従を強制しているうちに、いつかはセンスマインドはごく自然  
に法則に服従するようになります。

あなたの仕事は、各感覚器官が互いに対立しないで協力し合う  
ように訓練することにあります。だれもがこの生涯において自己  
の真目的を達成し得るまでに、各感覚器官を完全に調和させ、単  
一体として働くようにしておかねばなりません。これが達成され

るならば、多くの古くさい考え方や習慣的想念は消滅し、新しいすぐれた想念がこれにとってかわるようになります。われわれの各感覚器官によりなされる決定を盲目的に受け入れるかわりに、われわれはあらゆる結果の背後にある真の宇宙の因を探究し始めるようになるでしょう。

「結果」という言葉は何を意味するでしょう？ 一つの「結果」は一つの動因すなわち「原因」によって生じます。それは一動作の直接の結果です。樹木、植物、動物、惑星などを含む自然の万物は創造者の結果です。創造者は「結果」の原因をなします。すなわち「結果」を存在せしめるのです。自動車は人間の想念の「結果」です。ガソリンと火とを混ぜるならば「爆発」と呼ばれる「結果」が生じます。

あなたが結果の世界に住んでいるという理由がこれでおわかりでしょう。しかし地球人はすべての「結果」の背後にある基礎的な原因を見ることはできません。この点でも宇宙人は高い進化をとげています。彼らはセンスマインドを統合させて（コントロールして）万物の奥にある宇宙の因の本質と調和し、それを理解させることを知っているのです。

#### センスマインドをコントロールする多くの方法

われわれが各感覚器官をコントロールし、それを統合する一つの方法は、自分が何か誤ったことを行なっているときに自分へやってくる印象類にたいして自分自身を意識的に従わせることです。このよい例として、自分がかんしゃくを起こして他人にどなりつ

ける場合をあげることができません。そのときただちに恥ずかしくなり、もっとうまく自分を抑制すればよかったのにと後悔します。そこで相手にあやまることによってその過失をとり消し、心中では再びセンスマインドに打ち負かされまいと誓います。

ところがいつかまた事態が悪化して、かっとなり、そうになるとします。しかしこんどは言葉をつつむのが容易になり、真の進歩がなされているのがわかります。こんなふうにして自分の各感覚器官を抑制するごとに、そうするのがますます容易になり、ついには自分が主人となって各感覚器官を充分に抑制するようになります。しかしこれは容易な仕事ではありません。

われわれは進化という階段を昇ってゆくのが必要です。よくわかりませんが、とにかく昇ってはいるのです。この一例を地球上にいまなお住んでいる原始的な種族に見出すことができます。過去において彼らは一人の選ばれた少女をいけにえとして神にささげたものでした。しかし今日では少し進歩して少女のかわりに、最大の戦利品である水牛をいけにえにしたりします。これによってわかるように彼らは一応進歩しているのですけれども、今日の一般人は血のしたたるいけにえだけを見て、彼らがいかに何らかの価値ある教訓を学んでいるという事実には気づきません。一個人の水準を引き上げて石器時代の文化から脱却し、現代の文明の水準にまで至るには、この地上で何度生まれかわりを経ればよいかということをおあなたは考えることができますか？

われわれが高度な惑星に生まれかわるほどに進化するには、あと何度生まれかわる必要があるでしょう？

感覚器官を訓練するのに別な方法は、他人にたいする、または

自然の望ましくない現象にたいする非難をなくすことです。本講座の始めに述べましたように、創造者が森のなかへ毒草を造つたことで非難するかわりに、その毒草が自然のなかで一定の仕事をもっていて、ある有用な目的に役立っていることを知らねばなりません。

要約すれば、われわれが創造者の計画に疑惑をもち、周囲の事物に誤りを見たりするたびに、その問題の別な面を考える必要があるのです。そうすれば、そうなるべき理由が、そうなつてはならない理由とともに常に発見できるでしょう。

これを行なうにつれて、あなたが感受する印象を観察し、その内容を分析することを必ず心がけて下さい。毎日の終わりに、就寝前にノートブックをひろげて、あなたが設定した水準にまで達していなかったと思う物事をすべて、自分で行なつたけれども取り消すか変更するほうがよかつたと思われる物事すべてを書き記してごらん下さい。次に、あなたが行なえよかつたと思う物事か、または状況を正しくするためにこれから行なおうとする物事を記入しなさい。そうすればこれらの誤りを意識的に思い出して、自分のセンスマインドの注意をうながすのに役立ち、同時に物事が誤っていたことをセンスマインドに印象づけることになり、将来に同じ状況が発生するときは別なやり方を試みなさい。時が来れば、自分が最初に示した反応よりも異なる反応を示すのが容易になってきます。いかに急速にあなたは望ましくない習慣を排除して新しくすぐれた習慣をとり入れることができるかに驚くでしょう。

多くの想念印象は潜在意識層にある

多くの想念印象すなわち、触感、はきわめて微妙で底深く埋められていたために、われわれはそれに全く気づきません。これは潜在意識のなかに存在していて、表面の意識層へ決して出てきません。この一例は人体の各種の不随意機能にたいする命令です。

センスマインドにたいして「宇宙の諸法則に従え」と命じること、及び本人が何の努力をしなくてもセンスマインドが潜在意識層で自動的にその服従を続けるようになるほどに訓練することは可能です。これが起こる様子をきわめてはつきりと説明する別な例をあげましょう。

われわれは意識的な想念と努力を要する何らかの行為をなして、それが自動的に行なわれるようになるまでに発達させることができます。たとえば自動車の運転はどうでしょう。あなたが始めて運転の練習を試みるとき、ハンドルをいつ切ればよいか、ブレーキをいつ踏むか、アクセルをいつ踏んだらよいか、といった事柄を記憶するために多くの心の努力を必要とします。加うるに信号の見分け方やその他たくさんの小さな事を記憶しなければなりません。こうした多数の事柄を記憶するのは不可能事のように思われます。もしひとたび精神錯乱状態になれば、あなたは完全に万事の支配力が留守になって、続いて起こる混乱状態のなかでたやすく車を破損させることにもなります。あなたは不均衡になり混乱しますので、当然容易に心に来るべき簡単な物事が思い出せません。

ところが数ヵ月車の運転練習をした後に起こる状況と右とをく

らべてごらん下さい。あなたはすでにセンスマインドが潜在意識に没入するほどに訓練していますので、運転はかなり自動的に行なわれるようになっていきます。こんなふうにして潜在意識が引き継いだならば、あなたは車中の他人と談話をしながらも他の動作に注意を集中したり、交通信号で赤が出たら止まったり、アクセルを踏んだりゆるめたりすることができるようになります。しかも車の運転に関して意識的に考えたりしないのです。それはもはやあなたもあなたが運転台にいないかのごとく起こる潜在意識的な行為になっていきます。実際、ときとしてあなたは数マイルを運転しながら何かの拍子にハッと気づいて、それまで道路、別な車、停留所、その他の物を見ていなかったことを知ることがあります。あなたは自分の潜在意識でのみ車を運転していたわけです。あなたの表面の意識は何か別な事柄にひっかかっていたのです。かつては大きな意識的な努力を必要としたのに、いまは自動的に物事が行なわれているのです。

これと全く同様に、われわれは自己訓練によって肉体を望ましい方法で各種の状況に順応させることができるようになります。ある場合は目的を達成するのに多くの力を必要とするでしょうし、またほとんど力を要しない場合もあるでしょう。

かりにあなたがひどいかんしゃく持ちだとして、それを抑制したがついておきます。この場合先ずなさねばならぬことは、自分自身にたいして「おだやかな態度を保て」と心で命じて、普通ならば自分をいらせさせる物事に「楽観的であれよ」といつけることです。かんしゃくに打ち勝てない場合は、ただちに考えなおして自身に無理やりにおだやかな態度をとらせ、微笑し、自

分の気分をコントロールするように努力下さい。これを行なうごとに次第にそれが容易になってくるのがわかります。するとやがて自動車を運転するときと同様に自分のかんしゃくを抑制するのが無意識に行なわれるようになるでしょう。そのかぎりにおいて何物もあなたを困らせることはできません。

次の第三課では想念・印象の性質を説明することにし、そのために電気の性質、物質、静電気、荷電などについて考察します。ぜひお読み下さい。

## 第二課の試験

次ページの各項目のなかで正しいと思われるものの符号(A、B、C、D)を○でかこんで下さい。各群のなかに正解が一つだけ含まれています。それ以外は誤った答えですが、これは今日世界中でひろまっている誤った考え方をあらわしています。これはあなたの思考力を促進するためにわざとつけ加えられたもので、それによってあなたは正しい解答を選ぶのに推論する必要があります。宇宙人の見地から与えられた正しい解答だけがこの講座で正しいものとなります。

— テレパシー講座第二課終わり —

受験希望者は解答を記入の上、次ページを切り取って三〇〇円を添付してお送り下さい。ハニー氏が用意した「カギ」にもとづいて当方で採点した上で返送します。受験料の一部をハニー氏へ送り、残りは本会の経費にあてます。



1 人間の性質を研究してみると次のことがわかる

- A 人間は働くのに五つの感覚器官を応用する。そして第六感をも持っている。
- B 人間は自己の周囲すべてのものを知覚する力を持ち、潜在意識的に宇宙の諸法則に従う能力によって働いている。
- C 人間は四つの感覚器官を持つ存在にすぎない。
- D 人間は大抵の物事について自分の考えを訂正する必要はない。

2 人間の第六感

- A 人間が超感覚的知覚作用を発達させるための径路である。
- B 大抵の人間のなかにはっきりと潜在している。
- C それが適当に応用されると人間を高い境地に発達させることができる。
- D 実際には存在しない。

3 次の各項で誤っているのはどれか

- A 四つの感覚器官のすべてはその存在を触覚に頼っている。
- B 人間は無意識になっても、すべての肉体的な感覚器官は完全な状態にある。
- C 人間が無意識になれば、見たり、聴いたり、味わったり、かいだりすることはできない。
- D 人間は触感を失っても、なお四つの感覚器官で正常に働くことができる。

4 自分を悩ませる多くの物事について真理を知ろうとする場合

- A われわれは次のようにするとよい
- B 大宗教団体の教祖たちに相談する。
- C 大英百科辞典かそれに類する参考書を調べる。
- D 創造者のやり方をあらわしている、自然のなかに見いだされる実例を見る。
- E あきらめる。なぜなら真理は決してわからないから。

5 われわれが自然のなかに表現されている創造者の実例を見る

- A とき、次のような重要な真理に気づく
- B 自然のさまざまな物は互いに戦争状態にある。
- C 自然の創造物の多くは無用なもので、特別な目的に役立っていない。
- D あらゆる創造物は有用であり、それぞれ一定の仕事を持っている。
- E 創造者の誤りの多くが自然のなかに見られる。

6 次の各項で正しいのはどれか

- A 自然の万物は互いに独立している。
- B 自然のなかには不必要なものがある。それは排除されねばならない。
- C 自然を見ると、われわれは真実の型を見ることができない。
- D 完全な秩序ある相互依存が万物のすべてにあまねく存在している。

7 次の各項で正しいのはどれか

- A 自然の万物のなかで人間だけは孤立し、自然の法則をゆがめている。
- B 動物はテレパシーに感応しないし、それを応用しない。
- C コン虫は人間の永続のために不必要である。
- D 人間は宇宙において独特なものであるので、自然の創造物の支持をほとんど必要としない。

8 次の各項で誤っているのはどれか

- A 人間をも含んで自然の万物は同じ英知の表現である。
- B 肉体の自然な、または潜在意識的な行動は宇宙の法則に従っている。
- C 多くの異なる自然の法則が万物を創造するのに応用された。
- D 人間は存在の背後にある基本的な因、すなわち宇宙の因の知覚力を失っている

9 次の各項で正しいのはどれか

- A 人間の各感覚器官は互いに結束して、自分たちの成長を助成するために一大勢力を結集している。
- B 人間の各感覚器官はほとんどいつも互いに戦い合っている。
- C 人間は正しい道を行くためのガイドとして自分の各感覚器官に頼ってよい。
- D 普通のセンスマインドは人間の背後にある基本的な宇宙の因を知覚している。

10 次の各項で誤っているのはどれか

- A 聴覚が除かれとも他の感覚器官は正常に働く。
- B いわゆる「触覚」が除かれても他の感覚器官は正常に働く。
- C 肉体の接触による感覚が除かれても、他の感覚器官は正常に働く。
- D 視覚が除かれても他の感覚器官は正常に働く。

11 次の各項で正しいのはどれか

- A 人間は各感覚器官を、宇宙の法則に従って調和して働くように訓練することができる。
- B 人間は各感覚器官を、宇宙の法則と調和して働くように訓練することはできない。
- C センスマインドのおもな部分はソウルマインドと呼ばれる。
- D センスマインドはコントロールされないが、われわれはそれをコントロールしなくても、うまくやってゆくことができる。

住所  
氏名  
年齢  
職業

# 編集後記

◎ アダムスキー著、宇宙哲学、に関する照会がよくありますが、この邦訳版はまだ出版されていません。自家版を出そうかとも考えていますが時期は未定です。

◎ 最近アダムスキーはハニーとは別に、「生命の科学講座」を出し、その第一分冊がすでに到着しています。本誌に連載したいところですが紙面不足で不可能です。余暇をみて別に刊行しようかと思案しているところです。

◎ ベルギー、アントワープのGAPリーダー、モリス及びメイ・モリー夫妻、英国のGAPリーダー、レズリー・オトリイ氏から録音テープを送ると連絡してきました。右両国の円盤事情について説明してあると思いますので、これが来るのを楽しみにしています。アダムスキーとハニーからもテープを送るよう両者に依頼中です。

◎ 各国GAPや海外の円盤研究団体から情報が続々と来ますがやはり紙面の都合で掲載できません。

◎ 本号には電気関係の参考書類を紹介しましたが、これは書店を通じてご注文下さい。発行所と書名を知らせるだけで注文できます。本号の「質疑応答」中に出てくる米国の偉大な霊能者、故エドガー・ケイシーについては、東京都中野区昭和通三の五〇、霞ヶ関書房（振替東京二六二五四）から詳細な伝記「奇蹟の人」（三二〇円、送料七〇円）が出ています。ハニーはケイシーをきわめて高く評価しています。

◎ 「私のUFO目撃日記」の工藤智恵子さんは伊東市在住のタピストで、日記とともに或る奇妙な体験記を寄せられました。編者もその問題を調査しましたが、真相がつかめず、興味深いものがあります。

◎ その他にも不思議な体験記を送ってよこされた方が二、三ありましたが、いずれも発表はしないでくれという依頼がありましたので掲載はさしひかえます。それにしても、事実は小説よりも奇なり、というバイロンの言葉が今更のように思い浮かんできます。

◎ 各方面から寄せられる賛辞や激励の手紙・テープ類に心から感謝しております。ただしタイプ打ちをやっている期間中（約十日間）は返事が遅れがちになりますのであしからずご了承下さい。

◎ 質問その他の手紙は遠慮なくお送り下さい。タイプ打ちの期間外ならばすぐに返事をさし上げることができます。

◎ 会員のなかに高校生や中学生の方が少数おられますが、その人たちの手紙を読んで「この若さでよくこんな深遠な思想を持つものだ」と驚くことがあります。

◎ 本誌の旧号は次のものが少し残っています。一九六二年11月号、12月号、一九六三年1月・2月号、3月・4月号、5月・6月号、7月・8月号（以上一部送料共一〇〇円）、9月・10月号、11月・12月号（以上一部送料共一二〇円）。旧号一そらいをご注文の場合は送料当方負担とします。

◎ 誌代切れの方には振替用紙を同封しておきました。（久）

|                                        |
|----------------------------------------|
| 日本GAPニューズレター 一九六四 1月・2月                |
| 編集発行人 久保田 八郎                           |
| 発行所 日本GAP                              |
| 島根県益田市益田古川<br>振替 松江二六三〇<br>（久保田八郎個人名義） |
| 昭和三十九年<br>二月十日発行                       |
| 通巻第20号                                 |
| 頒価一〇〇円・送料二〇円                           |